

関西学院大学オープンセミナー(1996年10月19日)

象徴的形態としての日本の風景

オーギュスタン・ベルク *
森 川 甫 訳**

近代性の象徴的形態

エルウィン・パノフスキーによれば、ルネッサンスにおける線の遠近法の発見は、中心的位置から対象化された世界を把握する近代的主体の発見の象徴的形態であった。この遠近法は実在の物理的表示の比率を計測するという点で近代的科学の視点に近いということができよう。つまり、物理的次元を超えたいかなる延長(すなわち、形而上学的次元)を欠いた純粋に地上的な環境形態である。)

このことは、遠近法が純粋に視覚的であること、風景の非象徴的理解を意味する。つまり、19世紀の写真によって固められた理解である。空間の展望は実に、写真の再生する物理的・化学的現われ以外の何物でもない。したがって、ルネッサンス期ヨーロッパにおいて発見され、そして、間もなく遠近法がその表現を構築するに至る風景は、デカルトの二元論とニュートンの宇宙空間に基づいて樹立された一つのパラダイム、近世の古典期西欧のパラダイムとして後に樹立された視点から見られた、近代的世界の表出の象徴的形態として考えることができる。

しかし、パノフスキーもまた、遠近法が観察者の目の主体性を想定したのと同様、逆説を含んでいることを記した。実際、主体性は客観的世界や宇宙的空間とは、何ら関係がない。デザルグの投影幾何学発見(1639年)とニュートンの『光学』の出版(1704年)以後、(理論において、まさに視点ではない)科学の視点は、画家の風景への視点

と乖離している。

ヨーロッパの風景の歴史は、それ以後、乗り越えることのできない二者択一的状況に分裂している。一方では、地球上のある部分の客観的断片であり、他方では、ある任意の人の感覚や夢や意図をともなった断片の主観的表現である。

東アジアにおける風景

世界史的規模で見ると、風景という観念はまず最初に西暦5世紀の初頭、南中国で考え出された。それに反して、同時期に聖アウグスチヌスはキリスト教徒の視線を感知できる世界を見ることから自己自身の意識を内省することへ導いた。それ以来、ルネッサンスまで、真理はわれわれの周囲の風景においてではなく、われわれの記憶のうちにある神の超越の記しにおいて探究されなければならなかった。この考えは、プラトンのアナムネシス、すなわち、感知できる世界の相対的存在とは異なった超越的存在の無意識的記憶と似ている。

風景(山水)についての中国の観念は逆である。六代の詩人、陶淵明 Tao Yuanming (367-427)が書いているように、此中有真意、つまり、真意は風景に内在している。これはゲルマン、ロマンティックの思想、Darstellung、つまり、風景における神の顕示よりも多くのことを表現している。なぜならば、中国の山水においては、なんら超越的なものがないからである。そして、道 Dao、つまり、宇宙の究極の意味が展開しているのは、「それ自体によって」此中であり、他のどこでもないか

*フランス国立社会科学高等研究院現代日本研究所教授

**関西学院大学社会学部教授

らである。

「自然」(ziran)という語は、ずっと後に、natureの近代西欧的概念を翻訳するために用いられるようになった。しかし、それは創造に関するキリスト教的観念や対象化された自然的世界の観念とは何の共通性ももたなかった。この両者は前者においては、超越的存在、神を、そして、後者においては、客体とは存在論的に区別された主体(デカルトの「考えるもの」res cogitans)、それ故、すべての自然的存在を対象として客観的に観察されるのものにできる主体を仮定している。中国的観念においては、「自然」(ziran)は明白に自発的展開、あるいは、道 Daoの造化(これはヘラクレイトスの形而 physisを Aufgehenとしてハイデッガーが翻訳しているのと比較できる。)であり、また、詩とか絵画における意味の内容の現実化されたものあり、それ故、宇宙の造化の継続以外の何物でもないのである。

この展開の外には、主体にとって場所はない。それが現われる場所と時に風景、すなわち、光景のみがある。李白(701-762)がおそらく東アジアで最も有名な風景詩で書いているように、「只有敬亭山」(zhi you Jingting-shan)なのである。

内主体化 Insubjectivation

今日では、超越論的主体の近代古典的観念と宇宙空間はきわめて特殊なものであり、また、ある世界観の発現として歴史的に年代を決定できることを知るようになった。その源泉は絶対有と相対有(Timaiosにおける ontos onと genesis)、に関するプラトンの区別にまで遡ることができる。今では、私たちは空間と主体と両方とも、相対的で、相関的であることを知っている。しかし、いわゆる、非主体化の最も明白な表現においてさえも。私たちヨーロッパ人は主体の存在を表明することを強いられている。例えば、ライナー・マリア・リルケが「鳥がわれわれの中を静かに飛ぶ」Die Vogel Fliegen still durch uns hindurchと書いたとき、彼はやはり、主体性がここで完全に世界の内的空間 Weltinnenraumと同一視され、かくして、風景に現われると表現して、「われわれ」Unsといわなければならなかった。そうする

ことによって、ドイツ語は世界そのものと混同されることの出来ない人間主体の、関連する領域を構成するのである。

他方、中国語や日本語のような言語は、ヨーロッパ的世界観の hypokeimenon(下にあるもの、すなわち、subjectum)である主体の関連領域を完全に消すことができる。例えば、日本語における「さむい」のような普通の表現は、「私は寒い」か、「寒い」のどちらかを意味することが出来る。言い換えれば、それは英語とか他のインド・ヨーロッパの言語では、一方では、主体の内的世界(私は寒い)、他方では、客観の外的世界(寒い)に必然的に分割される。中国語では、李白に「只有敬亭山」と書くことを可能にしたのは、そうした融合である。日本語では、黄枝が次のような俳句を詠むことを可能にした。

風鈴の

小さき音の

下にいる

おおよその意味は、窓辺の鈴(風鈴)の下に、ある存在があるということである。問題は、黄枝の俳句のなかにある動詞「いる」に主語がまったくないことである。この欠如した主語は何らかの文法的、実存的人物、彼女とか、私たちとか、動物などであろう。李白の風景に「只有敬亭山」があるように、この風景にはただ風鈴があるのである。

しかし、私たちは論じなければならない。東アジア人は私たちと全く同じ人間存在を表現している。この表現構造で隠されているもの(文法的主体)は、事実、(話し、生きている主体、すなわち、詩人が想定している)その発現の事実と主題そのものによって含まれている。

これはなるほど真実ではあるが、いっこうに問題を解決しない。黄枝の風鈴の下におかれている hypokeimenon は、純粋な真実在 Dasein であって、主体的なものに関連するものではない。それは主体性を備えた光景の全体なのである。

言いかえれば、それは、いわゆる、環境、あるいは、雰囲気である。それが文法的に(黄枝の詩では欠如した主語の座を占めるのは述語の「いる」である。)だけでなく、存在論的にも(「いる」が含んでいる存在は潜在的主体を包摂している光

景そのものの存在である。) 主語そのものになるのである。

風景自体における主体性のこの内在は、(主体が言語から消え、風景に溶け込んでいることを私たちが知っているという意味で) 脱主体化であり、また、(風景自体が主体性をもっている) 主体化である。

私はこの現象を in が否定(非主体化、あるいは、脱主体化)と投入 introjection (暗示されている発言者の主体性は風景に投入されている)を意味している insubjectivation として示そう。

主体の無への没入

偉大な哲学者、西田幾多郎(1870-1945)が、彼のいう「場所の論理」において、述語のアイデンティティが存在論的に主語のアイデンティティに先行することを主張することにより、近代西欧世界観全体を転倒しようと努めた。そうすることによって、主語のアイデンティティに関するアリストテレスの論理(Aは非Aではない、すなわち、合理的推論の基礎)によって表現された)を論駁しただけでなく、(デカルトのコギトによって見本として表現されている)近代的主体の主体性の可能そのものを論駁した。西田の思想において、「主語面」は「述語面」に没入している。この包摂的動きは結局、「絶対無」に通じている。

より簡明にいうならば、場所の論理はAが非Aとなり、そうすることによって消失するアイデンティティ、すなわち、メタファーの論理である。

西田が主語の述語への没入に関するこの思想を最も明白に表現している文章(『西田幾多郎全集』第4巻261ページ)それ自体が、文法的に主語を欠いており「これまで有であった主語面をそのままに述語面に没入するが故に、特殊なるものの中に一般なるものを包摂するといふ意思の意味をも含んで来るのである。」かくして、西田が哲学的に言おうとしていることを言語学的に設定していることに注目するのは、興味深いことである。それは「没入すると」と「含んでくる」という動詞、すなわち、欠如した主語の、ここで用いられている述語である。

西田はここで内在の問題にも風景の問題にもな

んら言及していないが、彼が述べていることは、2つの面においてこれらの主題に関係していることを私は示したい。

第一に、述語(すなわち、現在進行していること、パフォーマンス、光景、あるいは、何らかの存在や行動の場所)が主語を没入するということを強調することは、黄枝が俳句で表現していること以外の何物でもないからである。事実、日本語では、日本の世界観と同様、hypokeimenon は主語ではない。それは述語、つまり、光景、あるいは、場所そのものである。風景のアイデンティティは公理的に主体性のアイデンティティに先行しており、そして、主体はそれに同一化する。

第二に、これは実際、意味するもの(意味と意思)が一般に所与の主語によって風景に投影されているというよりも、この特定の景色に体现されている(内在している)からである。西田が述語面が「特殊なるものの中に一般なるものを包摂するといふ意思の意味をも含んで来る。」というとき、彼の意図は、陶淵明の詩句「此中有真意」にまで遡ることが出来る。この中国の詩人が心に描いた特定の風景(遠景に廬山があり、鳥が巢に帰って行く夕暮れの光景)は、内在的に彼の人生と宇宙の最も一般的な意味、すなわち、道を体现したものである。後に、Chan(日本語の禪)は、他のイメージ、すなわち、春一般の意味を体现しているこの特定の花のイメージによって同様の思想を表現した。

そのような考えは、感覚的世界の特殊な相対有が絶対有のただ投影されたものであり、そして、絶対有が相対有を超越しているというプラトンの思想とは正反対である。私たちのアイデンティティ(主体のアイデンティティ、つまり、I(je, ich, ego, ioなど)は私たちがおかれている状況とか、あるいは、私たちが見ている風景の変化によって影響を受けることがありえないと考えるとき、私たちが受け継いだ思想とは正反対である。実際、「敬亭山」、あるいは、他の山について語る時、Iは全く変わらない。場所、あるいは、パートナーを換えて見よ。Iは変わらない。存在、言葉と意思は私のうちにあり、そして、意味は私が世界について発する表明の中にある。少なくとも、用いている言葉を通して、私は象徴的に真実在や物事

の意味に近づく。私の用いる言葉は、この特定の風景に体现されているのではなく、言語の一般的な次元に存在している。そして、私は丁度、「風景」という語が特定のもの（つまり、敬亭山とか、富士山）を超越しているように、私は風景を超越している。

しかし、この古典近代の、あるいは、デカルトの見解は、「只有敬亭山」とか「風鈴」にある風景を捉えていない。そこでは、意味するものが場所そのものである。そして、主体とともに、言葉は場所に属している。言葉と主体は風景に没入している。陶淵明は彼の詩を彼（この「彼」は私が想定するが、もちろん、明確には分からない）は「言いたいが、今では言葉を忘れてしまっている」（欲遍辨已忘言）と言って終えているではないか。主体もなく、言葉も消えてしまう。主体ではない。発現においてでもなく、発言のためでもない。「そこに」意味するものが残り、風景の中に内在する。

空なる中心

パノフスキーは遠近法が主体の中心性に関する近代的仮定と関連があることを示した。実際、この構造は抽象的表現において（外的なものに対する「考える物」の一瞥とか、直観において）と同様、具体的表現において（絵画による空間の作成においてとか、あるいは、ヴェルサイユとか、カールスルーエのようなバロック都市の放射同心都市によって）も例示された。そのような構造の中で、中心は非相対的、自己制定的、本質的存在、すなわち、主体によって占められている。

これはまさに日本の空間性において消されているものである。（つまり、例えば、異なった光景各々が何の統合的遠近法もなく続いている東京の小石川後楽園の様な庭園において、あるいは、私たちの「私」の代わりに語の、状況による変化において）常に相対的で、典型的な、（文法的、あるいは、他の）主体の位置があるだけでなく、もしも中心があるとすれば、それは空 vacuum の様な働きをしている。後楽園では、池の中にある島から庭を統合的に見ることが出来よう。しかし、この島に行くことは出来ない。出来ることは、ただ、周辺の位置から水を隔てて島を眺めなが

ら、池の周りを廻ることである。しかし、決して、この眺めの焦点を占めることは出来ない。この島は、実際、蓬萊山、東の海にある神話的の山を表わすと想像されている。

しかしながら、そのような中心的空の最も進んだ表現は、ローラン・バルトが『象徴の帝国』で指摘しているように、東京の中心、皇居である。それを廻ることはできるが、天皇自身を除いては、その焦点を占めることが出来ない。

それでは、天皇は他のすべての人々の上にある主体、つまり、日本人世界における最も本質的な存在であろうか。

逆に、天皇は西田幾多郎によって日本国民のアイデンティティの場所（そして、潜在的には、東アジア共栄圏に属する地球上の人間のアイデンティティの場所）と同等視されている。いかなる存在も没入する純粋な空、つまり、絶対的な無である。

この意味で、日本の象徴的中心と日本人性の中心は空 vacuum なのである。そのような姿が、きわめて多くの日本人論において、日本自体の全体がブラック・ホールであるという思想を含めて、さまざまな目的で、また、多様なスケールで生みだされてされてきた。それは実際、多く仏教、道教に負っており、また、インドや中国に負っているが、日本人の特異性を強調することにより、その姿の普遍性を用いる論理は、私が上に引用した文章において西田が表現したものである。つまり、日本というこの特定の場所の自己を同一視するために、意味と意思において、主体一般の本質、つまり、私の代わりに、一般を特殊に包摂しているのである。

初景色

記号論理学の初歩の心得のある者ならば誰でも、事実、近代西欧の主体の普遍的な中心性と本質性の逆転した表現以外の何物でもない、空なる中心 void center のこの特徴に基づいて日本人性の構造を把握することを試みたいと思うであろう。人は、実際、例えば、仮定された空 vacuum の廻りを、転回している、都市形態に関するジル・リットット Gilles Ritchot の理論を東京の形態、あ

るいは、形態の欠如の解釈に応用するかもしれない。

しかしながら、私は、プラトンのティマイオスにおけるコーラのイメージのある特徴にそれを関係づけることによって、むしろ西田の「場所の論理」にもう少し入りこみたい。西田は「場所の論理」の第一行目でその点に簡単に触れてはいるが、それ以上には展開していなかった。

プラトンの本文はこの点に関して、全く明白ではないが、コーラは感覚的世界の相対的存在に関する存在論的条件 condition として、解釈できる。この condition という語の意味はここでは、その語源、dha「場所」、cum「ともに」、condere「基礎を築く」に非常に近い。それは仮のものでなく、絶対的な真の存在 (idea, eidos) とは判然と区別された、これらの存在の生成と死が起こる環境である。

この関係は相対的存在がいかにかそれ自身の何らかの本質、あるいは、アイデンティティを持つことが出来るかという問題に通ずる。つまり、感覚的世界におかれている生成が、ただ、モデルのコピーだとすると、それはいかにしてそれと区別できるのであろうか。

アラン・ブトー Alain Boutot の解釈 (1987年 p. 224) によれば、コーラの役目は絶対有に溶け込まれないように相対有を保護する特定の環境を作ることである。

私はこれをプラトンがコーラに関して用いている「産婆」(tithênê) のイメージと関連づけたい。コーラは生成の「産婆」であると彼はいう。さて、「産婆」は胸に抱いて赤ん坊を世話する母性的イメージである。

事実、この母性的イメージは日本人が彼等のアイデンティティについて持っている見解に、明白に、あるいは、隠然とまわりつく。西田の「場所の論理」は、このイメージの意識的、また、無意識的使用に関して、他の多くのものなかで、とくに際立っただけ一つの例である。私は彼の「場所」を事実、日本人を母の胸に置くことによって、世話する「産婆」であると理解している。それは、彼等の各々の主体を没入することによって、歴史的にモデルとして設定した絶対的存在、つまり、最初は中国、次に西欧に溶け込むことか

ら、彼等の各々の存在を保護するためのマトリクスである。そして、彼等がそのモデルに近づくと、ますます、彼等はマトリクスへの所属を強調しなければならなかった。すなわち、後者の例においては、日本の独自性と、近代が主体と呼び、彼等がなることを拒否している空を同時に強調することである。

これは私の見解では、日本人のアイデンティティの象徴的形態である。夫佐恵の次の俳句が例示しているように、それはまさに、日本の風景である。

初景色
富士を大きく
母の郷里

日本人の主体が帰り、消えることを持ち望んでいる母の胸の近くにただ、富士山のみが存在するところである。

REFERENCES

- AUGUSTIN (Saint) (1994) *Confessions. Livres IX–XIII*. Paris : Les Belles Lettres.
- BARTHES Roland (1970) *L'Empire des signes*. Genève : Skira.
- BERQUE Augustin (1997) (1986) *Nature, artifice, and Japanese culture*. London : Pikington.
- BERQUE Augustin (1997) (1993) *Urban form and the social bond in Japan*. London : Pikington.
- BERQUE Augustin (1995) *Les raisons du paysage. De la Chine antique aux environnements de synthèse*. Paris : Hazan.
- BERQUE Augustin (1996) *Etre humains sur la Terre. Principes d'éthique de l'écoumène*. Paris : Gallimard.
- BOUTOT Alain (1987) *Heidegger et Platon*. Paris : Presses universitaires de France.
- CHENG François (1977) *L'écriture poétique chinoise*. Paris : Seuil.
- DALE Peter (1986) *The myth of Japanese uniqueness*. London : Croom Helm.
- FUSAE, quoted p. 23 in YAMAMOTO, vol. 5.
- HAAR Michel (1985) *Le chant de la terre*. Paris : l'Hème.
- HEIDEGGER Martin (1983) *Einführung in die Metaphysik. Gesamtaufgabe, Bd 40*. Frankfurt am Main : V. Klosterman.
- HEISIG James W. and MARALDO John C. (1994) *Rude awakenings : Zen, the Kyôto School, and the*

- question of nationalism*. Honolulu : The University of Hawaii Press.
- HOLZMANN Donald (1996) *Landscape appreciation in concient and early medieval China*. Hsin-chu, Taiwan : National Tsing Hua University.
- KEMP Martin (1990) *The science of art. Optical themes in Western art from Brunelleschi to Seurat*. New Haven and London : Yale University Press.
- LI Bai, quoted p. 128 in CHENG.
- NISHIDA Kitarô (1927) *Basho*, in *NKZ*, vol. IV (1966). Tokyo : Iwanami Shoten.
- NISHIDA Kitarô (1940) *Nihon bunka no mondai*, in *NKZ*, vol. XII (1966). Tokyo : Iwanami Shoten.
- NKZ (Nishida Kitarô Zenshû)*, see NISHIDA.
- OBI Kôichi (1988) *Chûgoku no inton shisô*. Tokyo : Chûôkôron sha.
- OSHI, quoted p. 148 in YAMAMOTO, vol. 2.
- PANOFSKY Erwin (1975) (1927) *La perspective comme forme symbolique*. Paris : Minuit.
- PLATON (1985) *Timée, Critias*. Paris : Les Belles Lettres.
- RITCHOT Gilles et FELTZ Claude (1985) *Forme urbaine et pratique sociale*. Montréal : Le Préambule.
- TAO Yuanming, quoted p. 164 in OBI.
- RILKE Rainer Maria, quoted p. 246 in HAAR.
- YAMAMOTO Kenkichi (1977) *Saishin haiku saijiki*. Tokyo : Bungeishunju, 5 vol.

(この翻訳は、1997年2月、*Zeitschrift fur Semiotik* に執筆者が寄稿した原稿、LANDAPE IN JAPAN AS A SYMBOLIC FORM による。同原稿は、1996年10月18日、同執筆者によって日本語で行われた関西学院大学オープン・セミナー『場所を生かすとは』の英語版である。—編集委員会注)